

全国の生協職員による、岩手県内の被災地での引っ越し支援

岩手県生協連

この夏、岩手県内では全国の生協職員による被災者の引っ越し支援活動が続けられた。避難所から仮設住宅へ移る人々の引っ越し作業を手伝いながら、被災地の現状を体感し、被災者の言葉に耳を傾ける――。参加した職員たちは大粒の汗を流しながら、貴重な経験を共有した。

少しでも、被災地の人たちの負担を減らすために

5月31日から2カ月半の間、岩手県の被災地で、全国の生協の職員による引っ越し支援の活動が繰り返された。これは日本生協連と岩手県生協連が岩手県災害ボランティアセンターからの要請に応える形で始めたもので、全国の会員生協に呼び掛けて参加者を募り、岩手県の被災地で避難所から仮設住宅への引っ越しがピークになる6月から8月まで、少しでも現地の人たちの負担を減らそうと行なったものだ。

全国の生協の職員たちが集まったのは、岩手県の中心からやや南寄りの遠野市。緑に囲まれた人口3万人余りの静かな街だが、現在はボランティア活動の拠点がいくつもでき、多くの人が出入りしている。

各生協からの参加者は、生協の引っ越



荷物を運ぶ高坂さん(おかやまコープ)。背後のトラックは東都生協のものを借りている。



遠野教育児童会館前で出発前の朝礼。通常は7時前後に出発するが、遠方へ向かう時は6時前になることも。

し支援活動の拠点である遠野教育児童会館に集合。ここに常時10人前後が待機し、岩手県災害ボランティアセンターの要請に応じて、2人ひと組となり被災地へ向かう。

毎朝6時過ぎには全員が起き出し、7時前後には出発。一番近い釜石市の沿岸部までは1時間ほどだが、目的の被災地へ3〜4時間かかることもある。

引っ越しの最中にも、震災当日の記憶がよみがえる

8月5日、おかやまコープから参加した大内典之さんと高坂知典さんの2人が向かったのは大槌町。沿岸の市街地のほとんどが津波で流された上、大規模な火災が起き、死者・行方不明者が1、400人以上に上った街だ。

2人が午前11時過ぎに着いたのが町内の安渡小学校。ここに避難していた60

炎天下、避難所の大槌町中央公民館から荷物を運び出す大内さん(おかやまコープ)。

歳代のご夫婦が少し離れた仮設住宅へ移ることにになり、その支援を行なう。

一行はいったんご夫婦の知り合いの家へ向かい、そこで保管してもらっていた衣服や寝具類をトラックに積み込むと、仮設住宅のある果樹園へ向かった。偶然にも、この果樹園は震災当日にご夫婦が逃げ込んだ場所。当時の模様がよみがえったのか、興奮気味に語り始めた。

「私は工場で働いていて、すぐに家に戻ったのですが、お父さんがのんびりしているんです。『お願いだから、早く逃げて！』って、2人で果樹園まで車で駆け登りました」

お連れ合いは孫の写真を持ち出そうとしていたそうで、妻に急き立てられて命拾いしたそうです。

「津波は正面の海から来ると思うでしょう。そうじゃないんですよ。いったん川を上ってグルリと回り、襲ってきた。堤防で波を防ぐことができると信じた人が逃げ遅れたんです」

仮設住宅での新しい生活が始まるが、震災で職場も大きな打撃を受け、「仕事探し」がご夫婦の懸案事項だという。何度もお礼を言われながら、大内さんと高坂さんは次の目的地へ向かった。

大槌町の中央公民館では、震災当日から5カ月間避難生活を送っていた女性が待つていた。やはり町内の仮設住宅への引っ越しだ。2人は、公民館で衣類や寝具を受け取り、さらに知人宅へ預けていた荷物をトラックに詰め込むと、内陸寄りの仮設住宅へ向かった。

「11月には仮設店舗で美容室を始められることになりました。ここからは自転車です30分かりますけど、頑張らなくてはね」。美容室も家も流されたというこの女性は、仕事を再開できることがとてもうれしそうだった。

いても立つてもいられなくて 支援に応募

「いわて生協さんが震災で大きな被害を受けたと聞いて、これは絶対に行かなければと思いました」

大内さんは、宮古市の店舗「マリコン」で研修を受けた経験がある。震災後、何としても支援に向かいたいと何度もおかやまコープの募集に応募し、やっと今回、引っ越し支援に来ることができた。

「節電で店内は暗めでしたが、組合員さんが大勢買い物に来ていて、新鮮な商品もそろって活気にあふれていました」
久しぶりに訪れたDORAが、地域に



荷物を運び入れる仮設住宅に到着したところ。



作業中の大内さんと高坂さん。



引っ越しが終わり、ほっとして雑談が始まるものの、話題はいつしか震災当日のことに。

なくてはならない存在であり続けているのを見て感心したという。

「阪神・淡路大震災の時も、おかやまコープは支援に向かいましたが、あれから16年がたち、その経験を持つ職員はだんだん少なくなっています。経験や知恵を伝承していくためにも、東日本大震災の被災地支援には若い人がどんどん参加してほしいですね」と高坂さんは言う。

高坂さんは、おかやまコープ・人事総務グループ統括として支援活動の参加者を募集する立場でもある。今回現場に立ったことで、自分で見て聴いて経験することがいかに大事かを確信したという。

この日は2軒とも避難所から仮設住宅への引っ越しのため、大きな荷物はなかった。しかし、一時的に避難していた家やアパートからの引っ越しでは、大型家電や家具などを運ばなければならないこともある。支援する職員たちは、大粒の汗をかきながら奮闘していた。

幹線道路沿いのがれきは撤去され、一見、復興が進んでいるように見える。しかし、引っ越しのために裏道へ回れば、まだまだ混乱状態のままの地域が数多く残されているのが分かる。依然、多くの支援が求められているのだ。

この引っ越し支援活動は8月14日まで続き、参加した生協・事業連合・県連の数は23、参加者は延べ537人、トラック（配送車）延べ267台、手伝った引っ越し軒数は201軒に上った。

（文・写真 山本明文）